<u>5</u> 10 15 20 25

私はその人を常に先生と呼んでいた。だからここでも ただ先生と書くだけで本名は打ち明けない。これは世間 を憚かる遠慮というよりも、その方が私にとって自然だ からである。私はその人の記憶を呼び起すごとに、 「先生」といいたくなる。筆を執っても心持は同じ事で ある。よそよそしい頭文字などはとても使う気にならな いい。 私が先生と知り合いになったのは鎌倉である。その時 私はまだ若々しい書生であった。暑中休暇を利用して海 水浴に行った友達からぜひ来いという端書を受け取った ので、私は多少の金を工面して、出掛ける事にした。私 は金の工面に二、三日を費やした。ところが私が鎌倉に 着いて三日と経たないうちに、私を呼び寄せた友達は、 急に国元から帰れという電報を受け取った。電報には母 が病気だからと断ってあったけれども友達はそれを信じ なかった。友達はかねてから国元にいる親たちに勧まな い結婚を強いられていた。彼は現代の習慣からいうと結 婚するにはあまり年が若過ぎた。それに肝心の当人が気 に入らなかった。それで夏休みに当然帰るべきところを わざと避けて東京の近くで遊んでいたのである。 彼は電 報を私に見せてどうしようと相談をした。私にはどうし ていいか分らなかった。けれども実際彼の母が病気であ るとすれば彼は固もとより帰るべきはずであった。それ で彼はとうとう帰る事になった。せっかく来た私は一人 取り残された。 学校の授業が始まるにはまだ大分日数があるので鎌倉 におってもよし、帰ってもよいという境遇にいた私は、 当分元の宿に留まる覚悟をした。友達は中国のある資産 家の息子で金に不自由のない男であったけれども、学校

が学校なのと年が年なので、生活の程度は私とそう変り

もしなかった。したがって一人ぼっちになった私は別に 恰好宿を探す面倒ももたなかったのである。 宿は鎌倉でも辺鄙な方角にあった。玉突だのアイスク リームだのというハイカラなものには長い畷を一つ越さ なければ手が届かなかった。車で行っても二十銭は取ら れた。けれども個人の別荘はそこここにいくつでも建て られていた。それに海へはごく近いので海水浴をやるに は至極便利な地位を占めていた。 私は毎日海へはいりに出掛けた。古い燻ぶり返った藁 葺の間あいだを通り抜けて磯へ下りると、この辺にこれ ほどの都会人種が住んでいるかと思うほど、避暑に来た 男や女で砂の上が動いていた。ある時は海の中が銭湯の ように黒い頭でごちゃごちゃしている事もあった。その 中に知った人を一人ももたない私も、こういう賑やかな 景色の中に裹まれて、砂の上に寝そべってみたり、 を波に打たしてそこいらを跳ね廻るのは愉快であった 私は実に先生をこの雑沓の間に見付け出したのである その時海岸には掛茶屋が二軒あった。私はふとした機会 からその一軒の方に行き慣れていた。長谷辺に大きな別 荘を構えている人と違って、各自に専有の着換場を拵し らえていないここいらの避暑客には、ぜひともこうした 共同着換所といった風なものが必要なのであった。 はここで茶を飲み、ここで休息する外に、ここで海水着 を洗濯させたり、ここで鹹はゆい身体を清めたり、ここ へ帽子や傘を預けたりするのである。海水着を持たない 私にも持物を盗まれる恐れはあったので、私は海へはい るたびにその茶屋へ一切を脱ぎ棄てる事にしていた。

60